

聖書：ピリピ 3：1～3

説教題：神の御霊による礼拝

日時：2017年2月26日（朝拝）

ピリピ人への手紙第3章に入ります。この手紙は全部で4章からなっていますので、今日から後半部に入ることになります。パウロは「最後に、私の兄弟たち」と始めます。この手紙はまだ半分までしか来ていないのに、なぜパウロは「最後に」と言ったのでしょうか。注解書を見ると、パウロはここで手紙を結ぼうとしたが、急に書くべきことが頭に思い浮かんだのでもう少し続けたのではないかなどといった意見が紹介されています。しかしここで「最後に」と訳された言葉は必ずしも「もう終わります」ということを意味しないようです。Iテサロニケ4章1節にも「終わりに、兄弟たちよ」というパウロの言葉があり、そこでも同じギリシャ語が使われています。そちらの手紙でも「終わりに」と言いながら、それから丸々2章も書いています。そのようにこの言葉は話を次に移行する際にも使い得る言葉のようです。

そうしてパウロが語っていることは「主にあって喜びなさい」ということです。このピリピ人への手紙は「喜び」で特徴づけられる手紙であることをこれまでも見て来ました。そのテーマがまたここに出て来ています。そしてここで初めて「主にあって喜びなさい」という表現が出て来ています。もちろんこのことは、これまで見て来た喜びは主にある喜びとは違うという意味ではありませんが、パウロはいよいよ「主にあって喜ぶ」ことについて語って行こうとしているということでしょう。

「主にあって」という言葉はギリシャ語では「エン・クリストー」、英語では「イン・クライスト」になりますが、これは信者がキリストと神秘的な仕方で結合していることを指す表現です。ぶどうの木と枝が一つにつながっているように、私たちはキリストというまことの木につながり、キリストと同じいのち、特にキリストが十字架を経て勝ち取った復活の祝福のいのちにあずかっています。果たして私たちは自分の喜びをどこに見出しているのでしょうか。ともすると私たちの喜びは周りの状況に依存しているものです。良いことが起これば喜べるが、そうでなければ喜べない。健康に自信が持てれば喜ぶが、そうでなければ喜べない。収入があつて経済的に恵まれれば喜ぶが、そうでなければ喜べない。すべては周りの状況次第。受身的に考えていないでしょうか。しかしパウロは「喜びなさい」と命じています。すなわち私たちが喜ぶためには私たちにすべき

ことがある。それはどういうことなのでしょう。それが「主にあって」ということです。すなわち自分が主とどんな関係にあるかを良く知ることによって、自分が結ばれている主を益々良く知り、その主との生ける交わりに歩むことによって。この方にあつて自分の将来にはどんな祝福が用意されているかを見つめることによって。そのようにして私たちはどんな状況でも喜ぶことができる。これまでも見ましたように私たちにとってのチャレンジは、パウロがローマの獄中からこのメッセージを語っているということでしょう。普通に考えたら最も喜べない人であるはずなのに、皆から哀れまれてもおかしくない状態にあるのに、パウロは牢屋の外にいる私たちに向かって「主にあって喜びなさい！」と励ましている。それは彼がその環境でも、この祝福に生き生きと生きていたからに他なりません。

彼はその際、「前と同じことを書きますが」と言います。これから彼が述べることは、ピリピ人たちがこれまでも聞いたことがあったことなのでしょう。パウロがピリピにいた時だったかもしれませんが、あるいは別の機会に何らかの手紙を通してだったかもしれません。もしかするとピリピ人の中からは「パウロ先生、そのことは前に聞きましたよ。だからもうそのことで先生を煩わせることはありませんよ。」という反応が返ってくることをパウロは予想したのでしょう。そこで彼は、これは私には少しも煩わしいことではないと言います。むしろ繰り返しこのことを語ることはあなたがたの安全のためになることなのだと言います。そのために骨折っているパウロです。そこまでして語ってくれるパウロのメッセージなのですから、ピリピ人たちも、また私たちも良く耳を傾け、これを心に留めなければなりません。

さてそうしてパウロが述べているのは「気をつけてください」ということです。2節には3回もこの言葉が繰り返して使われています。「犬」に気をつけて、「悪い働き人」に気をつけて、「肉体だけの割礼の者」に気をつけてと。これはいわゆるユダヤ主義者たちのことであつたと考えられます。聖書を見ると、この人々がパウロの福音に色々と反対したことが分かります。彼らの主張はイエス・キリストを信じるだけでは不十分であつて、正式な神の民になるには割礼を受けなければならない。ユダヤ人に帰化しなければならない。そして様々な律法の儀式を守らなければならないとするものでした。使徒の働き 15 章 1 節に、その人たちの主張が出て来ます。ある人々がユダヤから下つて来てこう教えていました。「モーセの慣習に従つて割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ」と。パウロはこの人々に注意せよ！と言っています。言い換えれば、この

人たちの主張に流されてしまったら「主にあって喜ぶ」祝福に生きることはできないということです。主にあって喜ぶためにはこの人たちに気をつけ、この人たちの教えに従わないようにしなければならない。

パウロはそのために、驚くべき仕方では彼らのことを表現しています。3通りの表現がここにあります。一つ目は「犬に気をつけて」。今日、犬はペットとして可愛がられ、愛すべき存在とされていますが、聖書時代はそうでなかったことが聖書の言葉から分かります。「彼らは、夕べには帰って来て、犬のようにほえ、町をうろつき回る」(詩篇 59 篇 6 節)。「犬は自分の吐いた物に戻る」(Ⅱペテロ 2 章 22 節)。犬は通りで吠え、ごみをあさって食べる、たちの悪い動物、不浄な動物とされていました。しかしパウロはここでユダヤ主義者たちのことを逆に「犬」と呼んでいます。つまり彼らの方が霊的な異邦人である。神の民ではない。その「犬」に気をつけて！と言っています。

二つ目は「悪い働き人に気をつけて」。ユダヤ主義者たちは誤った熱心によって相当活発に活動したようです。ガラテヤ人への手紙からもそのことが分かります。そこでは「あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしている」と言われています。その彼らの活動によってガラテヤ諸教会が急速に別の教えに移って行こうとしていることにパウロが相当な危機感を抱いたことが記されています。そういう見過ごせない悪影響を与える人々であるということです。

そして三つ目に「肉体だけの割礼の者」とあります。原文ではここでカトメーというギリシャ語が使われています。これは「切り取る」という意味の言葉で、次の3節に出て来る「割礼」、ペリトメーという言葉とは違う言葉です。つまりパウロはユダヤ主義者たちの割礼は割礼ではないと言っているのです。日本語訳では「割礼」という言葉が入っていますが、パウロはその言葉は使っていないのです。彼らはただ肉体を切り刻んでいるだけである。そういう彼らに気をつけよ！と言うのです。

そう述べた上でパウロは3節で「私たちの方こそ、割礼の者なのです」と言います。パウロが問題にしているのは、一体どちらが真の意味での神の民なのかということです。「割礼の者」とは、ここでは「神の民」ということと同じです。一見、旧約時代と同じように、ユダヤ人として生まれ、割礼のしるしを身に帯び、様々な律法や神殿儀式を守る者が神の民であると思われかもしれません。しかし聖書は「外見上のユダヤ人がユダヤ

人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではない」と言っています。また「信仰による人々こそアブラハムの子孫」であること、そしてアブラハムへの祝福はキリストにあつて異邦人に及ぶようにと計画されていたので、神はアブラハムに「あなたによってすべての国民が祝福される」と前もって告げておられたと言われています。この御心に従ってキリストを信じ、キリストにこそより頼む者が真の神の民、割礼の者なのだとパウロは言っているのです。

このような真の割礼の者、神の民の特徴をパウロは3節で三つ述べています。一つ目は「神の御霊によって礼拝し」。聖霊は旧約時代から「メシヤの時代の祝福」として語られて来ました。それは確かにイエス様が地上に来られたことを通してもたらされました。この言葉と関係が深いのはヨハネの福音書4章21～24節のイエス様の言葉です。イエス様はサマリヤの女にこう言われました。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。」そして言われました。「真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」ここでの「霊」とは聖霊のことです。つまり聖霊によって神を親しく礼拝する時が来る。そしてイエス様は十字架と復活を成し遂げて天に昇り、ペンテコステの日に天から聖霊を注がれました。まさにこの祝福にあずかって、霊によって、すなわち神の御霊によって礼拝するという恵みに私たちは生かされています。

このように聞いても私たちはピンと来ないかも知れません。その実感が湧かないと言う人もいるかもしれません。しかし聖書によれば御霊から離れたクリスチャン生活は存在しません。もし私たちがイエス・キリストを救い主として認め、信じ、そのことで神をあがめているなら、それは神の御霊によると言っています。ローマ書5章5節には「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれている」という御言葉があります。もし私たちが神の愛を心に感じ、神を賛美し、礼拝しているなら、それは聖霊によるのです。あるいはローマ書8章15節に「私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます」とあります。もし私たちがビクビクしながら神に近づくのではなく、神は今や私の父であると信じ、「天のお父様」と心から確信して祈れるなら、それは神の御霊によると言われています。聖書には私たちに對する御霊の働きのことがたくさん書かれています。それらを良く考えて行けば、問題は私たちが聖霊の働きに鈍感で聖霊に正

しく感謝していないことにあるのであって、実は私たちは聖霊によるとてつもない恵みの中に生かされていることが分かって来ます。

真の神の民の二つ目の特徴は「キリスト・イエスを誇る」ということです。一つ目に御霊の祝福のことが言われましたが、神の御霊に導かれる神の民はキリスト・イエスを誇るのです。時々、聖霊を強調する人々の中には不思議なこと、特別な体験ばかりを強調して、キリスト・イエスを誇るのではなく、かえって自分を誇る人たちである場合がありますが、それは正しくないということです。イエス様は「御霊はわたしの栄光を現わします」と言われました。聖霊に導かれる人は益々キリストの素晴らしさが分かり、キリストこそを賛美する人です。

そして神の民の三つ目の特徴は「人間的なものを頼みにしない」ということです。これは今の裏返しです。自分がどんな生まれであるとか、どんな能力を持っているとか、どんな業績を上げたとか、社会からどんなに認められた地位にあるかということに頼みにしない。ただ全くイエス・キリストを誇り、イエス・キリストにこそより頼む人です。

果たして私たちはどうでしょうか。今日、私たちの目の前に文字通りのユダヤ主義者たちがいるわけではないでしょう。しかし今日も、イエス・キリストだけでは不十分であって、そこに他の何かを付け加えることが必要だとするメッセージは様々な形を変えて存在するのではないのでしょうか。そうして私たちの心の目をイエス・キリストからいくらかでもそらせ、ついには引き離してしまおうとする働きがあるのではないのでしょうか。あるいは私たち自身の中にも「主にある」ということだけでは不十分であって、もっと他のところに私の喜びの土台を見つけるためにさ迷い出ようとする傾向があるのではないのでしょうか。そのために、獄中のパウロが持っているような喜びを十分に知らない状態にあるということがあるのではないのでしょうか。パウロは「主にあって喜びなさい」と言っています。主との結合関係にあるということの内に私たちのすべての喜びがあると述べています。パウロはそのことを続く4節以降で、自分自身のあかしを通して語ってくれます。その言葉に聞きながら、私たちも自分の喜びはどこにあるのか、どこに求めるべきかをもう一度良く考えたいと思います。そして神の御霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みとしない真の割礼の者、神の民の祝福に歩みたいと思います。